広がる世界

みんゆう新聞感想文コンクール最優秀・優秀作品

小学3・4年生の部

◆最優秀賞

「便利さと幸せ」

原町二小4年　宮原　知大真君

「便利さは幸福と一致しない」。この言葉を記事で見た時、どういう意味なのかなと思いました。別の日の新聞で、マッスルスーツやロボスーツの記事を読んだ時は、便利な機械があると困っている人が助かり、幸せになれると思ったからです。

ロボスーツがあれば、体の不自由な人を少しの力で動かすことができるので、介護する人が助かります。ぼくのおじいちゃんは右の手足がマヒしているので、介護する人がいなくても、一人で自由に体を動かせるようなロボスーツができると喜ぶと思いました。また、人の感情を読み取り、会話するロボットもあります。仮設などに一人で住んでいるお年よりは、会話ができるロボットがいれば、さびしい気持ちが少しはへると思います。

でも、体の不自由な人が一人で動けるようになる機械ができても、一人で住んでいるお年よりがロボットと会話をしても、便利だけど幸せではないかもしれません。なぜなら、おじいちゃんの背中を支えて歩くおばあちゃんの手のように、機械は温かくないからです。話をして笑っていても、ロボットの笑いと人間の笑いは違うような気がします。便利だけど、機械やロボットは人間とは違うのだと思います。病気の時、ロボットがかん病してくれると便利です。でも、ぼくはお母さんがかん病してくれる方が、ずっとうれしいです。そう考えると、機械だけではだめなこともたくさんあるのだと思いました。「便利さは幸福と一致しない」という土屋さんの言葉が、少しわかったように思いました。

これからは便利な物にたよるだけでなく、いろいろな物の使い方を見直して、どうすればみんなが幸せだと思う生活につながるのか、ぼくももっと考えていこうと思います。

◆優秀賞

「日本にもいたぞ、大型ティラノサウルス」

湯本一小3年　藁谷　琢也君

ぼくは、日本で初めて大型ティラノサウルスの歯の化石が見つかったと知ってびっくりしました。大型のティラノサウルスは、多く生息していた所にしかいないと思っていたからです。この新聞記事を読んで、見つかった化石からいろいろなことがそうぞうできることが分かりました。

今回見つかった大型ティラノサウルスは、全長十メートルもあったそうです。十メートルは、ぼくのしん長のやく八ばいです。ぼくは、このティラノサウルスがどのくらい大きいのかと思って、へやのはじからねそべってみました。すると、ぼくの家の三へや分ぐらいの大きさでした。そんな大きな生き物がいたなんて信じられません。

ぼくが一つぎ問に思ったのは、発見されたのが歯だけなのに、なぜ体の全長が分かるのか、ということです。いろいろな本を調べてみたら、太ももの骨からおおまかな体重が分かると書かれていました。もしかすると、いろいろなデータがあって、太ももの骨だけでなく、歯からも全長などが分かるのかもしれないと、ぼくは考えました。

今回見つかった二つの歯の写真を見て、欠損している歯の元の形をそうぞうして絵にかいてみました。そして、この歯は化石になってから欠損したのか、生きていた時に固いえ物をかじって欠損したのか、じっくり考えてみました。もしかすると戦っておれたのかもしれません。いろいろ考えてみたけど、答えはだれも分かりません。だから発見された化石からそうぞうするのは、とてもおもしろいです。

新聞には毎日たくさんの記事がのっています。これからも新聞を読んで、いろいろなことを学んでいこうと思っています。

◆優秀賞

「みんなで生きていくために」

二本松北小4年　渡辺　和泉さん

ある日の新聞に、とても大きな穴の写真がのっていました。私は気になって、お母さんといっしょに、その記事を読んでみました。

西シベリアの地中にたまっていたガスがばく発して、巨大な穴が四つもできたのだそうです。気温が異常に高くなり、凍っていた土がとけたのがばく発の原因だそうです。私は、これが「地球温暖化」のこわさなのかなと思いました。そこで、温暖化についての記事を探してみると、すぐにみつかりました。

たとえば、南太平洋にあるキリバスという島国が海にしずんでしまいそうだという記事です。そこでは、最近になって強い風がふいて、海水が床上まで入ってくるようになったそうです。もし日本がキリバスのようになったら、私は日本からはなれたくないけれど、ちがう国へにげます。キリバスの人々もつらい思いをしているのではないかと思います。

また、パプアニューギニアでは、あと三十年位のうちに主食のイモが今の半分ほどしかとれなくなってしまうという記事もありました。日本でいえばお米が食べられなくなるのと同じだと思い、とても悲しくなりました。

記事に出てくる地名を地球ぎで調べたら、いろいろな所で心配なことが起こっていると気がつきました。地球が丸い一つの星だから、同じようなことが起きるのだと思います。私の住んでいる日本とキリバスは、遠いけれど、つながっているのです。だから、私たちは助け合い、困っていることを解決するために、みんなで考えなくてはならないと思います。

地球温暖化という言葉は知っていたけれど、どんなことが起きているのかということは、新聞を読んで初めて知りました。悲しいことをこれ以上ふやさないために、私もできることを探して実行していきたいと考えています。

◆優秀賞

「原子力発電について考えたこと」

柴宮小4年　古川　舞桜さん

私は毎週日曜日、子ども新聞を読んでいます。福島原発についての記事がのっていて、私が読んでいると、母が関係のある新聞記事を持ってきて見せてくれました。それは「川内原発が再稼働」というものでした。私はそれまで、川内原発について知りませんでした。そして、記事を読んで「風力発電や水力発電、火力発電があるのに、どうしてまた原発で電気を作るんだろう。」と思いました。

福島の原発の事故が起きたとき、私はまだ五さいでした。そのときは原発事故より地しんの方がこわかったけれど、大きくなってくるにつれて、放しゃのうのこわさについて知り、原発事故によってひなんしたり、食べ物をせいげんしたりと、大変なことも分かりました。だから私は、原発は再稼働しなくてよいと思います。

また、新聞の同じページのとなりには、福島県川内村のふっこうについての記事がのっていました。川内村はかつてにぎわっていた高塚高原の登山道をじょせんしたり、キャンプ場を整びしたりしているという内ようです。緑の広がる高原の写真を見て、こんなにきれいな景色を、ずっと見れなくなっていたんだと思うと、原発事故はもうぜっ対に起きてほしくありません。

同じ漢字を使うのに、かごしま県の川内原発は再稼働して、福島県の川内村は原発事故からふっこうしているのが、不思議な感じがしました。

福島と同じ事故がくり返されることを、だれものぞまないと思います。日本は、福島原発の事故をわすれずに、安全に、電気を作る国でいてほしいです。

小学5・6年生の部

◆最優秀賞

「奇跡の復活Jヴィレッジ」

野田小6年　八重樫　佑希君

ぼくは、幼稚園のころからサッカーをやっていて将来プロサッカー選手になるという大きな夢がある。そんなぼくの目に、七月十四日『Jヴィレッジ本格除染開始』という嬉しいニュースがとびこんできた。記事によると、二〇一九年四月までに全面オープンするという。胸がわくわくした。

日本代表が二〇〇六年ドイツW杯直前合宿をJヴィレッジで行っていた時、当時三才だったぼくは、母に連れられて、連日応援に行ったそうだ。もちろんぼくに当時の記憶はないが、母の話によると、目をクリクリさせながらボールを見ていたらしい。三才のぼくにとってJヴィレッジは楽しい場所だったのだ。

しかし、今、ぼくの中ではJヴィレッジ＝サッカー場というよりも震災後に原発事故の対応拠点として機能していたイメージの方が強い。ぼくは、防護服を着た人たちがバスでJヴィレッジを行き来するニュースを見るたびにサッカー場として使える日が来るだろうかと心配になっていた。七月二十三日の新聞には、新設練習場のイメージ図も公開されていた。全国初の屋根付きだ。最新の宿泊施設や天然芝を導入するという。Jヴィレッジの存在がぼくの夢を輝かせ始めた。

Jヴィレッジがなかったら、こんなに早く原発事故を終息に向かわせることができなかったと言われるほど重要な役目を果たしたJヴィレッジ。東京五輪の男女日本代表の強化拠点になることで、本来の姿を取りもどしてほしいと思う。風評被害など多くの課題が残されているがサッカーをやっている多くの子供たちと一緒にぼくも復興に向けて取り組んでいきたい。そして、完全に復活をとげたJヴィレッジのピッチで思いっきりプレーできる日を楽しみに待ちたい。

◆優秀賞

「不安が残るオリンピック」

大島小6年　桜井　喬仁君

ぼくは、二千二十年のオリンピックが東京で開催される事になり、とても楽しみにしていました。

ところが、最近、会場になる国立競技場のデザイン、建設予算、収容人数等、いろいろ問題になっている記事を読みました。最初予定していた額の約二倍高くなりました。元の予算ですら高かったのに、約倍とはおどろきました。以前、オリンピックを開催した国では、五、六百億円ぐらいで会場を造ったのに、なぜ、そんなにお金をかけるのかなと思いました。競技場は、選手達が精一杯、気持ち良く競技する事ができて、それを観客の人達が一生懸命応援する、選手も観客も一体化できるような建物が良いのではないでしょうか。それなのに、デザイン重視の建物で、ここまで高額になるとは、計画性が無さ過ぎると思います。

結局、予算等の問題が多過ぎて、取り消しになり、一からやり直しになりました。しかし、今度は、その責任をだれが取るかという問題になり、関わった人が、インタビューされていました。ところが、その答えは、みんな、「私の担当はここまでなので、予算までは分かりません。」等、他の人に責任を押しつけていて、少しも反省している様子はありませんでした。

こういう時、大人だったら、なぜ、このような事になってしまったのか、真剣に考える人がいても良いと思います。ぼくは、こういう大人にはなりたくないなと思いました。

せっかく楽しみにしていたのに、こんな問題が起きては、オリンピックが無事成功するか心配になります。早く解決して、オリンピックが、大成功するようにして欲しいです。

◆優秀賞

「登山が教えてくれたこと」

泉北小6年　白土　愛理さん

富士登山という文字が目についた。なぜなら記事を見た六日前に私も林間学校で初めての登山をしたばかりだからだ。私達が登った安達太良山は千七百メートル。富士山と比べたら小さい山かもしれないが、長い時間をかけて山頂まで登り切った後はくたくただった。

東日本大震災の復興支援として、二〇一二年から行われている、「登ろう、日本一の富士山へ」は、本県を始めとする東北の高校生達の富士山登頂への挑戦である。登山の参加者には、震災や原発事故の影響で、まだ故郷から離れている人もいた。震災から四年以上が過ぎた。私達の生活も以前の様に落ちつきつつあるが、まだ不自由な生活を送っている人達がいることを決して忘れてはいけない。

残念ながら悪天候のため、総隊長を務めた登山家の田部井さんから登頂断念が伝えられ、続けて「頂上だけが山ではない。」とはげました。その言葉が私の心に強く残った。目標に向かって進むことも大事だが、止める勇気も必要であると知った。

一緒に登頂をした校長先生は、下山後の閉会式でこう話した。「私達は三つの支えがあり無事に登山することが出来た。天気の支え、山登りのステッキの支え、そして一番大切な人と人との支え合いである。」と。私達生徒、先生方、ボランティアで参加した保護者の約二百人での登山は多くの支え合いのおかげで、誰一人断念することなく終えることが出来た。

この記事を読んで、山頂を目指すだけが目標ではないと学んだ。それに気付かせてくれた登山は、私を少し成長させてくれた。普段の生活でも多くの人に支えられていることに感謝の気持ちを忘れずに、私も周りの人を支えられる人になりたい。そして、日本一高い山、富士山に、私もいつか挑戦してみたい。

◆優秀賞

「ゴールはきっと挑戦の先にある」

柴宮小6年　会津　春菜さん

私はこの記事の見出しを見たしゅん間おどろいて声を出してしまいました。『計361歳の挑戦』という見出しです。それは、平均年齢90歳を超える競泳の女子リレーチーム4人が、東京都内で開かれた日本マスターズ水泳選手権大会に出場し、4×50m自由形リレーの合計年齢360～399歳の部で、自分たちが持つ世界記録の更新に挑戦したという内容でした。結果、惜しくも達成はできませんでしたが、「これからも頑張りたい」と意欲をみなぎらせている写真付きの記事でした。

チームのひとり、楠目さんは言います。「気持ちよく泳げました。100歳まで続けたい」と。私の祖母より年上の方が大会に参加している事だけでもおどろきなのに、競泳のリレーで世界記録を持っていることに、再びおどろかされました。私が新聞を読まなければ知らなかったことです。私にとって90歳を超えても結果を出している彼女たちは、憧れてしまうほどかっこいい存在です。

私も水泳を習い、記録会や県の大会に参加しています。もし、私が世界新記録を出したら、嬉しいと思うだけで、さらに挑戦することはしないと思います。でも、彼女たちはちがいます。あきらめず、記録の更新に挑戦しようと前向きです。年齢では私の方が勝っていても、気持ちの面で負けました。世界新記録に挑戦する彼女たちの写真からは、キラキラした表情と、私に挑戦する意味・あきらめない意味を教えてくれているようでした。

とても小さな記事でしたが、この記事に出会えて良かったです。なぜなら、私の「挑戦」への気持ちが前より強くなったからです。彼女たちのように、何事にもあきらめないで挑戦し続ける人に私はなりたいです。